

俳句の縁

大内善一（誌友）

中学まで、福島県二本松市在の岩代町という、かつての伊達輝宗の城下町で育ち、昭和22年中学時代、町御出身の「草茎」（現在はくさくきと改名）主宰宇田零雨先生が来訪され「草茎二本松支部」が誕生し、中学時代の国語の大内貞先生にさそわれて初句会に参加したのが俳句入門であった。

宇田先生は、慶應義塾大学で教鞭をとられ、京都大学で芭蕉の研究で文学博士号の称号を取得された方である。

その後宇田先生の御推挙により、「草茎」の同人であられた今泉宇涯先生が経営する市川医院の書生として働きながら、都立第三高等学校夜間部（現両国高校）に進学させていただいた。

今泉先生は宇田先生の高弟で、後に「日本連句協会」が発足した際、初代会長に選任され、連句の復興に努められた方である。

「草茎」の句会・連句会にはいつも、今泉先生のお供をし参加させていただいた。会終了後、いつも反省会と称し、宴会が開かれ、宇田先生の御母堂様の御指導でお燗番を務めさせていただいた。御母堂様は二本松藩士の御息女であられ、きびしく作業や躰を教わったことが今日役に立っている。

戦後とぼしい生活の中、どこから泉のように酒があったのか、そのお燗番を、零雨先生の御母堂様の御指導をいただき、一升瓶の酒を葉缶にそそぎ焔炉にかけ、燗が付いたら徳利に入れ、それを配る役だったが、なかなか忙しいことであった。ある年の忘年句会終了後、いつもの大宴会となり、後に日展会長を務められた日本画の巨匠大山忠作画伯に「お燗番合格」といわれ、その年は「寅年」であったため即興で「虎」の絵を描いていた。掛軸に仕立て大事に床に飾っていた。

たところ、友人が家を新築した折、お祝に差し上げ喜んでいただいた。

成田山新勝寺光輪閣の襖絵、大山画伯の世紀に残るといわれる「日月春秋」と題する三十八面の作品は見事なものである。

大山画伯の俳句を紹介致します。

蛙の目賢愚二相を備えたり

梅雨の圈今日はっきりと離りけり

郭公に野の静けさやでこ屋敷

黄水仙黄に咲くはかはなし哀し

喪服きて古里の嶺おるかみぬ

ふる里に鳥帰る日のきよめ塩

東北本線二本松駅近くに大山忠作美術館が建立されている。

御令嬢の采子さんは、画伯同様酒豪で、現在もテレビ、舞台で活躍している女優さんである。

数年前、新潟県出雲崎に良寛逸話出雲崎油絵館が開館され、その記念館の看板を大山画伯が依頼され揮毫することとなったが、急逝され適わなかったため、采子さんが代りにと、大山画伯が大切にしていた、木彫の「良寛像」を寄贈された、その際、雪の中同行し現地の宿で「良寛像」に別れの宴をしたことがなつかしく思い出されたことである。